

# 「あいまいな暴力」が在日コリアンにもたらすもの

「人種的マイクロアグレッション」の概念をもとに在日コリアンへの民族差別を考察する

Racial microaggression against Korean-minority in Japan.

朴希沙 丸一俊介 高悠史 PAKU Kisa / MARUICHI Shunsuke/ KO Yusa

サポートグループ “それが一人のためだとしても” Support group “If it is only for one minority...”

Key words: マイクロアグレッション、在日コリアン、民族差別

## 目的

日本においては、韓国併合の後にその影響を受け、日本に移り住んだ朝鮮の人々をルーツとする在日コリアン（以下在日）が暮らしている。その数は日本国籍取得者も含めると100万人以上といわれる。近年その在日に対する「ヘイトスピーチ」が問題となり、国連人権委員会が日本政府に対し是正勧告を出すなど、民族・人種差別は日本社会における今日的課題となっている。

米国においては現代に特徴的な人種差別の在り方としてMicroaggression（以下MA）という概念が提唱されている。Sueらの研究(2007)においては、現在の人種差別は過去のものとは在り様を変化させ、人種差別はより隠された、より曖昧なものになっていることを示している。この研究においてヘイトスピーチは旧来型の差別であり、むしろMAに象徴される見えにくい日常的な差別の与える心理的影響の大きさを指摘している。

翻って、日本においては在日に生じる心理的問題を研究した論文は少なく、在日に関する研究の多くは社会科学の領域に留まっている。先行研究（例えば金・福岡(1997)）には在日への差別が「とりとめのない日常会話の中」にある「漠然と」しつつも「いやおうなく感得せざるを得ない脅迫」といったMAに類似した形態をとる事を示唆するものがあるものの、詳細な分析やその心理的影響は示されていない。本研究では、Sueらの研究(2007)を精査し、分析すると共に、MAという観点から日本における在日への差別とその心理的影響について考察する。

## 方法

Sueらの研究(2007)を精査し、分析すると共に、在日コリアンのサポートグループ「それが一人のためだとしても」(以下「してもの会」)においてなされた当事者研究のエピソード分析を行なった。

## 結果

人種的MAとは、「人種/民族的マイノリティに対する、意図の有無に関わらない、人種的侮蔑と侮辱を伝える、日常的で認識しづらい言語的/非言語的/行動的もしくは環境的な、冷遇や敵意や見下し」の事である。人種的MAは以下のような特徴を持つ。

① 不可視性…加害者にとって(時として被害者にとつ

ても)自身の行為の問題性を認識しづらい。それ故に、証明しづらく、取り扱いにくいもの。

- ② 深刻な心理的影響力…一見たいしたことがないように見えても、日常的な累積によって、旧来の明白な人種差別以上に、被害者に人種的な怒りやフラストレーションを引き起こし、自らのアイデンティティへのネガティブな感情、自尊心・自信の喪失、孤独などの感情を生む。被害者に強い感情的な動揺をもたらし、混乱と葛藤状態に陥らせる。
- ③ 形態…多くはとらえがたい冷遇や軽蔑的な視線や、ジェスチャーや、トーンといった形をとって無意識に向けられるものであり、①マイクロな暴行、②マイクロな侮辱、③マイクロな無価値化の3つの形態と9つのカテゴリーに分類される。

これらの先行研究を基に、「してもの会」においてなされた当事者研究のエピソード分析を行った結果、多くの点で人種的MAとの類似点が見出された。在日コリアンにとっての差別とは日本人や日本社会から向けられた「空気のように」「当たり前」に存在する「日常的な」「問題化しづらい」民族的アイデンティティ及びそれに結びついた自身の体験や自尊心への無視、無価値化、冷遇そして敵意である。

## 考察

今回の研究は対象者が限定されているという限界があるものの、限られた事例の中にも人種的MAとの類似性や共通点が多く見出された。さらに研究を進めていくことで、現代の日本における差別形態や心理的影響がどのようなものかを解明し、援助モデルの構築に繋げていくことが期待される。

## 参考文献

- 福岡安則(1993).在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ(中央公論社)
- Sue, D. W., Capodilupo, C. M., Torino, G. C., Bucceri, J. M., Holder, A. M. B., Nadal, K. L., & Esquilin, M. (2007). Racial microaggressions in Everyday Life: Implications for clinical practice. *American Psychologist*, Vol. 62, No. 4, 271-286.